7. 1-オレオイル-2, 3-ジアセチルグリセロール基質を用いたドライケムストリーによる血清中リパーゼ活性測定法の検討

（臨床中央検査部）
○高橋　寿実・和田　晴美・星川　喜江
荻　　三男・清水喜八郎

ヒト膵リパーゼは生理的にはトリグリセライドの α 位脂肪酸エステルの加水分解をする酵素であり，その水解特異性は広く長鎖脂肪酸エステルも水解する酵素である．したがって，リパーゼ活性の測定法は基質の選択によりヒト膵リパーゼに対する活性特異性や正確性および精度などに問題があった．また，測定方法においても比濁法，比色法等多くの方法があるが簡便で測定精度の良い方法がないのが現状である．

今回我々は以上の問題点を回避することのできる dry reagent chemistry を応用した1-オレオイル-2, 3-ジアセチルグリセロール基質を用いた血清中リパーゼ活性の測定について基礎的検討を行った結果，良好な結果を得たので報告する．

8. 当科で実施している顎関節腔二重造影法の実際

（歯科・口腔外科）
○水野　博之・竹内　　徹・高橋　達夫
阿部　廣幸・扇内　秀樹

顎関節疾患の中で臨床的に最も多く遭遇する疾患に顎関節症があり，これは開口障害，関節雑音，疼痛を主症状とする非炎症性疾患であるといわれている．近年，この顎関節症の中に顎関節部軟組織の障害，ことに関節円板の位置および形態異常を示す顎関節内障害が少なくないことが明らかにされ，その原因や病態に関する報告が，欧米ばかりでなく，本邦においてもしばしばみられるようになった．

このような顎関節部軟組織の障害の診断に際しては，単純 X 線撮影と共に顎関節造影法が必要であり，当科においては特に顎関節腔二重造影法を用いている．これは，顎関節腔内に造影剤を注入し，後にこれを吸引し，陰性造影剤として空気を関節腔内に満たし，撮影を行うものである．こうすることにより，上下顎関節腔内壁および関節円板表面に付着した造影剤のみが写し出され，関節円板の輪郭が明確となり，よって関節円板の位置，形態そして周囲組織の状態の観察が可能となる．

9. 口腔内白板症およびその類症—3例について—

（皮膚科）
○池田美智子・前口　瑞恵・菊池　りか
川島　　真・肥田野　信
（口腔外科）安藤　智博

症例1：71歳，男．初診の約2カ月前より舌に白色病変出現．組織学的に舌白板症と診断し，CO_2 レーザー療法を2回施行するも一部再発あり．症例2：63歳，女．初診の約半年前より舌に白色調線状の表面顆粒状の皮疹出現．近医にて口腔内カンジダ症の診断で抗真菌剤の含嗽を行うも拡大し，当科受診．舌白板症と診断し，CO_2 レーザー療法，現在経過観察中．症例3：68歳，男．約4年前より，右下口唇に白色調扁平な皮疹を生じ，その半年後両頬粘膜にも同様皮疹出現．某医で生検を受け，カンジダ症の疑いのもとに抗真菌剤の外用を受けるも，右下口唇と右頬粘膜の皮疹は拡大，隆起してきた．生検にて，右下口唇は oral florid papillomatosis，右頬粘膜は，有棘細胞癌と診断．右下口唇と左頬粘膜に対しては CO_2 レーザー，右頬粘膜には放射線療法およびブレオマイシン持続皮下注を施行．症例1，2では，乳頭腫ウイルス抗原の存在が免疫組織化学的に証明された．

10. 物理的蕁麻疹の1例

（小児科）
○猪野　雅孝・平野　幸子・三石　洋一
泉　　達郎・福山　幸夫

9歳女児，全身性蕁麻疹と嗄声，呼吸困難を主訴に来院．3歳時より，冬期寒冷時の運動にて蕁麻疹を認め，6歳頃より症状の増悪がみられ，全身性の蕁麻疹が冬期以外でも，軽度の運動にても出現し，さらに，嗄声や呼吸困難，悪心，嘔吐を認めるようになった．9歳時より，上記症状が階段昇降や氷水にても誘発されるため，入院精査した．

血液一般，血清化学，尿一般，免疫グロブリン，補体系は正常，運動負荷試験および寒冷負荷試験

にて尋麻疹の誘発を認め，ヒスタミン・トロンボキサンB_2の著明上昇，ピークフローの低下を認めたが，好酸球，CH_{50}，クリオグロブリン，PGF_1，ロイコトリエンC_4，D_4には変化はなかった．

以上より，運動・寒冷負荷により肥満細胞からのヒスタミン等の遊離により，血管透過性が亢進して血管性浮腫が出現すると考えた．

現在，ヒスタミンの遊離を予防する目的で抗アレルギー剤を投与し経過観察中である．

11．下唇部に知覚異常を伴った下顎逆性埋伏智歯の1例

（第二病院歯科口腔外科）
○当間　裕・竹山喜代美・河奈　丈彦
鎌形　有祐・岡　光夫

下顎智歯は位置および萌出の異常をきたすことが多いが，逆性埋伏智歯はまれである．また智歯周囲炎に継発する顎骨周囲炎により，一時的に下歯槽神経支配領域の知覚異常をきたすことがあるが，長期間の知覚異常を残存することはきわめてまれである．今回，われわれは下唇部に2年余にわたり知覚異常を伴った下顎逆性埋伏智歯の1例を経験したので，その概要を報告する．

症例は62歳男性．昭和59年1月19日$\overline{8|}$部歯肉腫脹を訴え来院．薬剤投与により腫脹は消退．その後炎症の再発を繰り返しその都度消炎処置を受けたが，昭和59年12月頃から右下唇部に知覚異常を覚え，昭和62年6月18日再来院．現症は局所の炎症症状がなく，右下唇部にしびれ感が認められた．X線上で右側下歯槽管を圧迫している逆性埋伏智歯像が認められた．昭和62年9月10日局麻下にて抜歯術を施行．術後経過は良好で，現在経過観察中である．

12．中耳メラノーシスの2症例

（第二病院耳鼻咽喉科）
○上原真由美・新井　寧子
（同・中央検査科）藤林真理子

メラニン色素が異所性に沈着した状態をメラノーシスと呼ぶ．中でも三叉神経領域に出現するものは，太田母斑と呼ばれることが多い．耳鼻科領域では，メラノーシスの報告は少なく，中耳のメラノーシスは極めて稀である．我々は中耳メラノーシスの2症例を経験したので報告する．

症例1：36歳，男性．右慢性中耳炎にて，鼓室形成術を施行した．術前，鼓膜に肉芽形成と青色滲出液らしきものを認めた．術中に鼓室粘膜と乳突洞粘膜に黒色の色素沈着を認めた．病理でHE染色，Fontana染色，鉄染色等を行い，中耳粘膜のメラノーシスと診断された．

症例2：53歳，男性．右真珠腫性中耳炎にて中耳根治術を施行した．術中，中耳から乳突洞にかけての粘膜に黒色沈着物を認めた．病理にてメラニン色素沈着を指摘された．耳後部，咽頭にも色素沈着を認め，臨床的に太田母斑と診断された．

13．前縦隔に発生した巨大悪性神経鞘腫の1治験例

（呼吸器外科）
○小山　邦広・中島　秀嗣・曽根　康之
板岡　俊成・横山　正義・新田　澄郎
（第一病理）武石　詢・豊田　智里

縦隔腫瘍のうち神経原性腫瘍はほとんどが後縦隔に発生するとされているが，今回我々は前縦隔に発生し，胸腺腫が疑われた悪性巨大神経鞘腫を経験し外科的に切除し得たので報告する．

症例は63歳女性である．昭和45年に重症筋無力症の診断をうけその後，臭化ジスチグミンの内服を継続している．本年9月の検診にて胸部X線写真上腫瘤影を認められ当院一般外科受診・胸腺腫を疑われ当科入院となった．入院後の神経学的検査では重症筋無力症は軽度であった．CT上左前縦隔に巨大な内部不均一な腫瘍を認め，胸腺腫の診断にて10月20日腫瘍切除術を施行した．術中所見では左肺上葉への浸潤を認め，左上葉切除術も同時に施行した．術後の病理組織診断にて悪性神経鞘腫の診断を得た．

本症例の問題点を文献的考察を加え検討する．

14．若年者脳血管障害の臨床学的検討

（神経内科）
○堤　由起子・内山真一郎・柴垣　泰郎
長山　隆・曽根　玲子・小林　逸郎
竹宮　敏子・丸山　勝一

【目的】若年発症の脳血管障害における発症要因の検討を行った．